

わしらの映画づくりと 高齢者の元気

田んぼdeミュージカル委員会代表
原田幸一 氏

事務局
斎藤征義 氏

素人のお年寄りがつくったミュージカル映画「田んぼdeミュージカル」は全国で評判を呼んだ。あれから5年、市町村合併の嵐に暴走する年寄りたちと題した第3弾「いい爺ライダー」を制作した。穂別町のお年寄りたちは、合併した鶴川町のお年寄りも巻き込んで、ゴールなき人生を突っ走ったまま、新しい映画の歴史を作っている。

代表の原田幸一さんは83歳、3作目にして主演をやらされた。すべての脚本を書いた斎藤征義さんは穂別で生きてきたお年寄りの歴史をドラマにしたかったと語る。

崔監督の指導でわしらの映画づくりが始まった(原田さん)

6年前でした。「月はどっちに出ている」などの映画監督崔洋一さんが町の講演会で、「映画は、やる気があれば誰でもつくれる」というお話をされ、ならば、わしらでもできるのかと相談したことから映画づくりが始まりました。



仲間が集まってどうするべかと話しているうちに、斎藤さんが札幌の書店から買ってきた脚本を見本に、脚本を書き上げたのです。崔監督は台本を見て、本当にやる気なんだと真剣になってくれました。

1作目の「田んぼdeミュージカル」は、NHKが「人間ドキュメント」で私たちの映画づくりを取り上げてくれたので、全国で評判になり、500会場で1万人以上が見てくれています。映画批評家からも好評を得ま

した。

各地の映画祭にも招待され、プロの監督からお年寄りの元気な表情が出ているという評価や素人がこういう作品をなぜつくれるのかという驚きの声もありました。

崔監督は当初から、作品としてクォリティーの高いものをつくりなさいと指導してくれました。厳しい指導が続きましたが、そのおかげで、2作目、3作目まで映画づくりを続けることができたのだと思います。

お年寄りの生きてきた歴史をドラマ(斎藤さん)

この町にはそもそも若いものが少ない。だったら、自分たち年寄りが映画づくりを通して元気になろうと考え、なるべく多くのお年寄りが出演できる映画ということで、ミュージカル映画になりました。脚本は、穂別町で70年も80年も生きてきた参加者のお年寄りの歴史を45分のドラマにしたものです。戦地から復員して農業をしている夫婦と跡継ぎ夫婦との葛藤を描いているのですが、そのなかに、跡継ぎ夫婦が結婚式を挙げていなかった親の結婚式をやってあげようという物語を差し込みました。結婚式にはいろんな人の人生が絡んでいきます。多くの人が出演できるということにもなりました。

年寄りによる映画づくりの現場(原田さん)

1作目には125人のお年寄りが出演しました。役場で煙たがられていた人、酔ったらどうにもならない人、口のたつおばあさんたちにまず声をかけました。役者をお願いしても、熱い人たちじゃないと誰も乗ってくれませんからね。そういう熱い人たちだから、現場で気に食わないことが起こると、けんかがはじまりやしないか、投げ出したりやしないかと気をもんでいました。ところが、いざ始めてみると、日に日にみんながまとまっていきました。

お年寄りのことですから、本読みでせりふの練習をやっているけど、本番では忘れてせりふが出てこない。歌も覚えられない。奥さんがせりふの練習に付き合ってくれないので、馬や牛を相手に練習する人もいます。でも、本番ではやっぱりせりふが出てこない。現場ではその場その場で指示して何回もやっています。

お年寄りだから病気はだれも一つくらいは持っています。しかし、明日撮影だといったら病院で駄目だといわれてても出てくるのです。そのため、スタッフに保健師さんや看護師さんにも加わっていただきました。

映画づくりのスタッフも年寄りがやっています。子供のころカメラが好きだった星勇さんがカメラマン、青年芝居をやっていた伊藤好一さんが監督です。みんな80歳を超えています。ミュージカルだから、衣装もいろいろ必要です。洋裁をやっていた人に衣装部のリーダーになってもらいました。ミュージカルに使う歌は町のおじさんバンドが作曲してくれました。

声に圧されて次の作品づくり (斎藤さん)

当初は映画は1作で終わりにしようと思っていました。ところが、出演を依頼したときにはあれほど困った顔をしていた人たちが、次は何をやるんだと声を掛けてくるのです。一つの映画づくりがこれほどまでにお年寄りに自信を持たせ、元気になるものかと不思議に思いました。



2作目はせりふで苦労したお年寄りのことを考えファッションショーならせりふなしでただ歩けばいいということで、「田んぼdeファッションショー」をドキュメンタリータッチで描くことにしました。

田んぼのど真ん中で、イベントとしてファッションショーをする。食べるのに追われて着るものなんか考えなかった時の晴着を回想し、現代のワーキングウェアを素敵に作ってファッションショーをドキュメンタリーにしていったのです。衣装は札幌の特殊衣料という会社に依頼し、ファッションショーの歩き方は札幌から専門家を呼んで指導してもらいました。ステージは田植えから稲刈りの時期までを別撮りして、ステージバックに流しました。

「俺たちに明日はない」と叫ぶお年寄りがイージーライダーに (斎藤さん)

3作目は早く撮らないと年寄りの「俺たちには明日はない」と声をかけてきました。「俺たちに明日はない」は車でしたが、オートバイならみんな若い時に乗ったことがあるので、イージーライダーでいこうとひらめいたのです。もちろん、ピーター・フォンダもデニス・ホッパーもこの町にはいませんので、お年寄りがハーレーダビッドソンにまたがって「いい爺いライダー」をやるのです。

たまたま穂別町と鶴川町が合併して間もなくでした。穂別町では合併に反対する人も多く、2つの町はそりが合わないところもたくさんありました。なら、



敵対するいい爺いライダー(暴走族)を鶴川町にもつくろうということになったのです。映画は、市町村合併でますます明日はない、だけど俺たちは頑張るんだという熱き思いを語っています。

3作目の「いい爺いライダー」は350名が出演したのですが、穂別から呼びかけて参加してくれた鶴川の人たちが200人にもなりました。市町村合併で明日はないと敵対する熱きいい爺いライダーたちは、実は映画づくりを通して一体感をつくっていったのですから、皮肉なことだと思います。

面影ビデオで新しい日本昔話がつくられていく (斎藤さん)

1作目を撮り終えたときから、出演した人たちのメイキング編を作っています。面影ビデオと称しています。お孫さんが後で見たときに、おじいちゃん、おばあちゃんは役者だったんだと思い出してもらえます。何十年後かに穂別の町はなくなるかもわかりません。面影ビデオは、末えいに贈るご先祖様のもう一つの日本昔話になるんです。

面影ビデオは一人一人脚本を用意し、特別な撮影もします。1人分をつくるのに3~4か月かかっています。これまで出演してくれた500人分をつくり終えるまでに何十年かかるでしょうか。出演者とスタッフには面影ビデオが出来上がるまで、元気でいてくださいよと話しているんです。